

第2コムハウス通信

2023年6月2日(金)

1058号

謹んで、宮崎勇様に捧げます。

私が宮崎さんと初めてお会いしたのは、2003年の秋でした。アルプス福社会がコムハウスに続くふたつ目の拠点として、「第2コムハウス建設運動」を地域に大きく展開していたときでした。当時コムハウスの施設長であった諏訪元久さんから、「今度できる第2コムハウスの施設長に、ぴったりの人がいるんだよ」と紹介されたのが、宮崎さんでした(まさにぴったりでした)。



その後も建設運動は、ご家族の大奮闘によって進められ、翌2004年度から第2コムハウスは開所できました。そして宮崎さんは、2004年度から7年間、第2コムハウスの初代施設長として、ご尽力いただきました。

さらに歴史をさかのぼると、宮崎さんは松本養護学校赴任中の1985年5月、「障害者の働く場をつくる会」を立ち上げ、卒業する生徒さんたちの「働く場」づくりの中心となり奔走されました。この「働く場をつくる会」がもとになり、2年後の1987年、共同作業所と生活寮がつくられ、それが現在のアルプス福社会に至っています。

すなわち、宮崎勇さんは、アルプス福社会の源をつくった方です。この背景にあったのは、1979年「養護学校義務化」がようやく実現されたのち、成人期をむかえた障がいのある方の「社会の受け皿」づくりが急務となっていたことであり、その一方で、社会の制度整備が大きく立ち遅れていたことでした。

当時、全国で急速にひろがっていった「共同作業所づくり運動」を推し進めたのは、切実なねがいをもちた障がいのある子どもさんのご家族であり、そのねがいに思いを重ね合わせた養護学校の先生方でした。

私は、この方々こそ、日本の障がい福祉の真の「英雄」にほかならないと思います。

なぜなら、わが国の障がい福祉を前に推し進めてきたのは、このような地域における地道で粘り強い、草の根の運動であるからです。自ら、たくさんの尊い汗を流した宮崎さんは、まさに英雄です。

また、宮崎さんは折にふれて、平和の大事さを語っておられました。この間は、ウクライナへの侵略に心を痛めるとともに、他国の脅威をあおって大軍拡に突き進む今の政治をありように、強い危機感を訴えておられました。

かつて第2コムハウス通信に、「平和への記述が多いのは、私の父が侵略戦争で犠牲になったことから…」と自ら記されていました。宮崎さんの平和に対する思いの奥には、深い悲しみがあることを知りました。

戦争と福祉は最も相容れないものです。今こそ、このことは重要であると思います。

そして、宮崎さんと一緒に働いて感じたことは、私は、福祉の仕事を自ら選び、働いていますが、宮崎さんは、教育・福祉の仕事から、この仕事に就くように“選ばれた人”である、ということでした。

天に才を与えられ、その才を大いに発揮された生涯であったのだと思います。

つねに笑顔であることの何気さなに、私は、計り知れない人としての強さと奥深さを感じるようになりました。

私も、私たちも、宮崎勇さんという存在自体に支えられてきたのです。だから今、どうしようもなくさびしいです。

なかまを愛し、子どもたちを愛し、ともに働く者を愛し、ご家族を愛し、雄大な自然を愛し、

平和を愛し、平和を「脅かすもの」に立ち向かい、

いつもおだやかで、しかし奥深い強さをもったあなたの姿を、私たちは決して忘れることはありません。

教育・福祉の仕事に長く力を尽くされ、アルプス福社会の源をつくり、発展に尽くされた宮崎勇さんに、

私たちは、万感の敬意と感謝を表すものです。そして、心から、ご冥福をお祈り申し上げます。

私たちはみんな、宮崎さんが大好きです。宮崎勇さん、本当にありがとうございました。

※宮崎さんご自身からのご依頼だと伺い、5月27日のご葬儀で、このような弔辞を読ませていただきました。

ただ実際には、涙があふれて、うまく読めませんでした。

村松功啓